性同一性障害における不登校, 自傷･自殺未遂などの問題行動の発生率の推移

佐々木 新介　指導教員 中塚幹也 教授

【緒言】

性同一性障害(gender identity disorder: GID)とは,「生物学的性と性の自己認識（性自認）が一致しない状態」である。GIDでは日常生活において様々なトラブルが報告されており、今回, 私達はGIDにおける問題行動の推移を検討した.

【対象･方法】

1997年4月～2006年7月に, 性別違和感を主訴に, Oジェンダークリニックを受診し、性同一性障害と診断された661例を解析した。

【結果】

1. 症例背景

性自認が女性, 身体の性が男性であるMTF（male to female）が254例, 性自認が男性, 身体の性が女性であるFTM（female to male）が407例であり, 10－20歳代が62.0%（410症例）を占めていた。性別違和感発生時期は、MTFは広範囲の年齢に分布し、FTMは小学校入学以前が大部分（68.3%）であった。

2. 問題行動について

不登校は24.5%, 自殺念慮は68.7%, 自傷･自殺未遂は20.6%に見られ、MTFとFTMで有意差はなかった。不登校、自殺念慮の時期は、中学校時代が最も高率であり、自傷･自殺未遂は, 高校卒業以降が高率であった。原因は, 性器, 二次性徴, 社会生活への不適応、恋愛など多要因であり, MTFにいじめが多いなど, MTFとFTMにより, また, 小学, 中学, 高校, 大学, 社会人などの年代により異なっていた.

3. GIDにおける近年の動向

GIDを知った時期は2001年が最も多く、認識から受診の期間は近年, 短縮傾向であった。

【考察】

GIDの問題行動は依然として高い発生率であるが、わずかに減少傾向にあることが示された。近年, 様々な報道でGIDに関することが取り上げられ, 特に2001年から放送されたGIDを主題にしたTVドラマの影響も大きかったと推測された. このようなメディアの影響は, 今まで, GIDという言葉を知らず悩み続けていたGID当事者が, ジェンダークリニックを受診する契機となっていると考えられる. 更には, 自助グループの活動, 新たな診療施設の開設, 戸籍の性別変更の法制化などと相まって, GIDの一般社会への認知度の向上にも作用している可能性もある.

若年者の受診も増加しているが, 特に小児では性別違和感を持つ症例のすべてがGIDではなく, 継続した綿密な観察期間には, 精神科医、産婦人科医, 泌尿器科医に加えて, 小児専門の医療スタッフが必要になると考えられる.

【結論】

メディアにより, 一般社会にもGIDの認識が広がっているが, 偏見を払拭する取り組みは継続する必要がある. また, 今回明らかになったGID症例の種々の背景に対応したきめ細かい支援が必要となる。